

和字「腺」の語構成における位置

王 敏東

1. はじめに

和字としての「腺」については、笹原氏(1990)の研究があり、動物学、遺伝学などにおいて、「腺」が「生産力のある語基」と見なされていることにまで言及されている。語レベルで取り扱ったものとしてはたとえば『日本語語彙大系』(2000)で「腺」を接尾語と見なした説があげられている。しかし、はたして「腺」は語尾にしか位置できないのだろうか。通常、「独立の用法を持っていない」「表す意義が形式的・抽象的」であれば、接尾語と認められる。そこで、以下、日本語と中国語の両方の観点から、「腺」が「独立の用法を持つか」「表す意義が形式的・抽象的か」という2点について検討していく。

2. 日本語としての「腺」

日本語には基本的に接中語の存在が認められていないので、「腺」が1つの単純語として独立して使われることが可能かどうか、「腺」が語頭に位置することがあるかどうか、という2点についてまず検討する。その上で、もしあるとしたら「腺～」は「接辞+語」の派生語か、「語+語」の合成語かという結論に導く。

2.1 日本語の「腺」は単純語か

『分類語彙表』(2004)では、「1.5604 膜・筋・神経・内臓」の「06」に、「腺」を含む語として「腺」、「皮脂腺」、「分泌腺」、「性化腺」、「へんとう腺」、「甲状腺」、「汗腺」、「涙腺」、「胸腺」、「乳腺」、「前立腺」、「内分泌腺」、「リンパ腺」がリストアップされている。

また、『NTTデータベースシリーズ 日本語の語彙特性』(2000)にも「腺」が取り上げられており、使用率が66の普通名詞とされている。

一方、一般の国語辞典ではどうなっているであろうか。

『広辞苑』(第五版、1998、岩波書店)では、「腺」は独立した見出し語とされており、語釈は以下のようである。

「せん『腺』（宇田川榛齋が創った国字。「医範提綱」で初めて用いた）動物の上皮から分化し、それぞれに特有の物質を分泌する器官。導管を具えて体外あるいは消化管内に分泌物を出す外分泌腺と導管が無く血液内分泌物を出す内分泌腺とがある。」

また、『日本語大辞典』（第二版、1997、講談社）には「セン【腺】部首〔月〕にくづき、和製漢字 JIS3303 音セン生物体内にあって、特色の物質を生産し、分泌する器官。「甲状腺、乳腺、涙腺」とある。

一方、『岩波国語辞典』（第五版、1995）の「腺」という見出しは「漢字音の項目」（当辞書の「凡例」により「漢語の造語成分という観点を中心にしてえらんだ漢字」とのこと）とされており、「生命を保つのに必要な物質を分泌したり、不要な物を排泄したりする働きする器官「腺病質、内分泌腺、扁桃腺(へんとうせん)、甲状腺、リンパ腺、唾腺」、乳腺、毒腺」の語積が付けられている。（注1）

では、専門的な辞書類はどのように扱っているであろうか。

『文部科学省学術用語集 医学編』（日本学術振興会、平成15年）では「腺」は1つの独立した用語として立てられている。また『日本医学会用語辞典 和英』（日本医学会用語管理委員会、2002）でも「腺」は1つの独立した見出し語として立てられている。当辞書「凡例」の、「本書に収録された語は「日本医学会用語辞典英和（以下英和という）」に収録された用語を基にして、和英辞典として編集したものである、採用された見出し語は約60000語である」という叙述とあわせてみれば、当辞書が「腺」を1つの語として認めるという立場は自明である。

また、「腺」が独立した語として使われた例は小学館『大辞泉』「せんがん」の語積に求められる。『大辞泉』（<http://dic.yahoo.co.jp/bin/dsearch?p=%C1%A3%B4%E2&stype=0&dtype=0>）「せん - がん【腺*癌】」における「各種臓器の分泌腺の組織に発生する癌。また、癌細胞が腺のような構造に配列している癌。」（注2）という語積に「腺」は名詞として独立して使われている。「各種臓器の分泌腺の組織に発生する癌」はたとえば「甲状腺癌」のような「～腺」の「癌」のことで、「癌細胞が腺のような構造に配列している癌」は「癌」の様態が「腺」という器官または組織のようになっていることの説明である。

2.2 日本語の「腺」は接尾語か

前掲『岩波国語辞典』（第五版、1995）の見出し語「腺」の下に「腺病質」という例があげられている。この「腺病質」は「今でもよく<うちの子は腺病質で・・・>などと用いるように、もう完全に日常語となっている」（注3）という。他に「腺」が語尾に位置していない語として、たとえば「腺ペスト」があげられる。腺ペストの流行に関する記事は明治頃の新聞などで

よく報道されており、今でもたとえば関西空港検疫所が「モンゴルで腺ペスト流行！」との海外感染症情報 (NO. 191、平成 13 年 8 月 9 日) を出したりしている。また、『文部科学省学術用語集 医学編』と『日本医学会用語辞典 和英』では、「腺」が語頭以外のところに位置している語の掲載例が比較的多く、整理してみると下表 (表一) のようになった。

表一 (注 4)

『文部科学省学術用語集 医学編』	『日本医学会用語辞典 和英』
腺房状腺腫 acinous adenoma	腺炎 adenitis
腺病体質 scrofulous diathesis	腺化 adenization
<u>腺癌 adenocarcinoma</u>	腺窩 lacuna, crypt, fossula, crypta ラ, foveola ラ
<u>腺窩性扁桃炎 lacunar tonsil</u>	<u>腺下垂体 adenohipophysis, anterior pillar of</u>
<u>腺下垂体 adenohipophysis</u>	fauces
<u>腺筋症 adenomyosis</u>	<u>腺窩性扁桃炎 lacunar tonsil</u>
<u>腺硬化症 adenosclerosis</u>	<u>腺癌 adenocarcinoma, adenomatous cracinoma</u>
<u>腺粘液肉腫 adenomyxosarcoma</u>	腺筋腫 adenomyoma
<u>腺肉腫 adenosarcoma</u>	<u>腺筋症 adenomyosis</u>
<u>腺嚢腫 adenocystoma</u>	腺筋肉腫 adenomyosarcoma
<u>腺線維腫 adenofibroma</u>	腺腔 lumen of gland, glandular cavity
<u>腺腫 adenoma</u>	<u>腺硬化症 adenosclerosis</u>
腺周囲— <u>形</u> periglandular...	腺細胞 glandular cell, glandulocytus ラ
<u>腺腫症 adenomatosis</u>	腺疾患 adenosis
腺腫摘除 excision of adenoma	腺脂肪腫 adenolipoma
腺状— <u>形</u> glandular...	<u>腺腫 adenoma</u>
<u>腺上皮 glandular epithelium</u>	腺周囲の <u>periglandular</u>
	<u>腺腫症 adenomatosis</u>
	腺腫摘出[術] adenomectomy
	腺腫内癌 cancer in adenoma
	腺腫様過形成 (増殖) adenomatous hyperplasia
	腺腫様甲状腺腫 adenomatous goiter
	腺腫様の adenomatous
	腺腫様ポリ[一]腺 adenomatous polyp
	腺症 adenopathy
	<u>腺上皮 secretory epithelium, glandular</u>

	<u>epithelium</u> ,epithelium glandulare ラ 腺上皮性新生物(腫瘍) glandular epithelial neoplasm 腺性口唇炎 glandular ch[e]ilitis <u>腺線維腫</u> adenofibroma 腺線維症 adenofibrosis 腺造影 (撮影) [法] glandulography [腺]導管 excretory duct,ductus excretorius [glandulae]ラ <u>腺肉腫</u> adenosarcoma <u>腺粘液肉腫</u> adenomyxosarcoma <u>腺のう (嚢) 腫</u> adenocystoma 腺膿瘍 glandular abscess 腺病質 scrofulous habitus 腺表皮癌 adenoacanthoma,adenocarcinoid 腺ペスト bubonic plague 腺房状腺腫 acinous adenoma 腺様癌 adenoid cancer 腺様増殖[症] adenoid,adenoid vegetations 腺様増殖体質 adenoid diathesis,adenoid habitus 腺様組織 adenoid tissue 腺様の adenoid 腺様のう (嚢) 胞癌 adenoid cystic carcinoma 腺様のう (嚢) 胞腫 glandular cystadenoma 腺様リンパ腫 adenolymphoma
--	---

ここに掲載したもののうち、「腺硬化症」、「腺造影 (撮影) [法]」、「〔腺〕導管」、「腺ペスト」などにおける「腺」は明らかに合成語の前部構造にあたる。

ちなみに、高野氏 (2004 : 21) は『医語類衆』の訳語としてみられる「腺」を<F1-post>単立・後接語基 (注5) としながら、『医語類衆』に見られる「腺毒性関節死骨」

(Paearthrocace) については「腺／毒性／関節／死骨」に分け、それぞれ「1字語基／2字語基／2字語基／2字語基」に対応させており (注6)、「腺」を「1字語基」且つ語頭に位置するという立場を示している。

上記2.1と2.2で述べたことをまとめると、日本語における「腺」は

1. 独立した単純語で、
2. 表す意味は極めて明確で、
3. 品詞は名詞で、
4. 他の語との組みあわせて合成語を構成することがある、

ということが分かった。

3. 中国語としての「腺」

中国語における「腺」が1つの単純語であるかどうかを検証するため、(1)独立して使われることがあるか、(2)語尾以外のところに位置し、他の語と結合し、合成語となることがあるか、を検討する。

3.1 中国語の「腺」は単純語か

『教育部重編国語辞典』に「腺」は1つの見出し語とされており、品詞が名詞であることと、「生物体内分泌化学物質的組織。有外分泌腺及内分泌腺兩種。分泌物為液狀。人體内有乳腺、汗腺、唾液腺等，植物的花亦有蜜腺。」という語釈が付けてある。また、代表的な大型中国語辞書である『辞源』（注7）、『辞海』（注8）に「腺」はそれぞれ独立した見出し語として立てられ、「日本所造字，讀如線，動物體肉中能分泌液之處，如分泌乳汁者曰乳腺，分泌汗液者曰汗腺。西名 Gland，吾國舊譯曰核。」と「讀如線。（Gland）生理學名詞，為營分泌（或排泄）一種液體之器官也。因分泌管（或排泄管）之有無及分泌（或排泄）道路之不同，而分内分泌腺與外分泌腺二種。詳内分泌腺及外分泌腺條。」の語釈が付け加えられている。

また、専門語としての「腺」はたとえば『動物學名詞』（2003）で1つの独立した見出し語として立てられている。書名のとおり、当書に収録された見出し語は名詞ばかりである。ちなみに、この『動物學名詞』は（台湾）教育部が公告したものである。

上掲の例から見れば、中国語における「腺」は品詞を名詞とする単純語であると考えられる。

3.2 中国語の「腺」は接尾語か

「腺」は語尾以外のところに現れることがあるか。

『教育部重編国語辞典』の見出し語にそのような例はない。

専門語については、たとえば『動物學名詞』に「腺泡」、「腺學」、「腺樣的」、「腺性垂體」、『病理學名詞』に「腺鼠疫」、「腺消失」、「腺病質結核病」、『實驗動物及比較醫學名詞』に「腺嚙吟」など、「腺」が語頭に位置する語がたくさんある。

ちなみに、上表に掲載された『文部科学省学術用語集 医学編』と『日本医学会用語辞典 和英』に収録された諸語のうち、「腺炎」、「腺癌」、「腺腫」、「腺様増殖[症]」、「腺様組織」などは日中同形語で、台湾の医療機構においても使われるという。

なお、このうち「腺癌」については、日中いずれにおいても2つの意味があり、その意味についても合致する。中国語の具体的な語釈は次のとおりである。

- ①腺に癌が生じる場合は「腺癌」という。たとえば、「甲状腺癌」など。
- ②腺以外のところ（または器官）に、腺の構造または組織のようなものが生ずる場合は（“原発部位不明”または“異常位置”の）「腺癌」という。

もともと、中国語は孤立語で、1字に形、音、義を備えている1語が基本である。（注9）和字「腺」は中国語に入って中国語らしく使われていると思われる。3. 1と3. 2の検証により、中国語としての「腺」は表す意味が明確で（抽象的でなく）、独立して用いられることもあるし、語尾以外、語頭に位置し、合成語の構成要素にもなりうるということが明らかになった。

4. まとめ

小論における検討を通して、日本語においても中国語においても、「腺」は独立した単純語であり、しばしば他の語との組みあわせにより合成語を作ることが分かった。

また、小論冒頭にあげた笹原氏（1990）の指摘のように、「腺」が新しい語を作る上で生産力が高い。とくに、科学の進歩にしたがって、新語の創出に「腺」が利用される可能性は今後も十分考えられる。将来、科学的新発見や需要にあわせて、「腺」が語尾以外の場所に位置する傾向はより一層強くなるだろう。

注

1. 実はいわゆる扁桃腺はそのような働きをもたないので、医学的には腺でないことが判明している。詳しくは王・許（2005a）、王・許（2005b）。
2. 下線は筆者による。
3. 杉本（1998：468）。
4. 両資料における掲載順に並べた。また、両資料ともに掲載された項目（用語）には筆者により下線を入れた。
5. 原文は「前接語基」となっているが、「後接語基」のミスプリントだと思われる。
6. 高野（2004：51）。ちなみに、この例は高野（1986）にすでに言及されている。

7. 初版『辞源』は1915年に上海で発行され、以来、何度も版を重ねてきた。また、管見のかぎりにおいては、日本が台湾を離れた1945年以降、台湾でも台湾版の『辞源』が数（または版）多く出版されており、基本的にはもと中国大陆で発行された『辞源』から大きく影響を受けている。とくに『辞源』に収録された「(～)腺」語群については、各版における差異が少ないと思われる。
8. 『辞海』に収録された「(～)腺」語群については王・許(2005c)が詳しい。
9. もちろん「葡萄」や「巧克力」のような多音節外来語もあるが、数は少ない。

参考文献

- (日本語)
- 高野繁男『明治期専門術語集『医語類聚』』（昭和59年度文部科学研究費補助金特定研究(1)報告)1986年
- 笹原宏之「国字と位相——江戸時代以降の例に見る「個人文字」の、「位相文字」、「狭義の国字」への展開——」『国語学』163、1990
- 『岩波国語辞典』（第五版）、1995、岩波書店
- 阪倉篤義「語構成序説」『日本語研究資料集【第1期第13巻】 語構成』（斎藤倫明、石井正彦編）、1997、ひつじ書房
- 『日本語大辞典』（第二版）、1997、講談社
- 『広辞苑』（第五版）、1998、岩波書店
- 杉本つとむ『杉本つとむ著作撰選』1998年、八坂書房
- 天野成昭・近藤公久『NTTデータベースシリーズ 日本語の語彙特性』（第7巻 頻度① 頻度②）、2000、三省堂
- 『日本語語彙大系』（3単語体系 さーの、第6刷）、2000、岩波書店
- 関西空港検疫所 <http://www.forth.go.jp/keneki/kanku/info/2001/191.html>
- 大木昌「飯島渉著『ペストと近代中国——衛生の「制度化」と社会変容——』（書評）『アジア経済』、2002、(http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Ajia/pdf/2002_01/book_review_oki.pdf)
- 日本医学会医学用語管理委員会編『医学用語辞典 和英』（3刷）、2002、南山堂
- 文部科学省・日本医学会『学術用語集 医学編』、2003、日本学術振興会
- 国立国語研究所『分類語彙表』、2004、大日本図書
- 高野繁男『近代漢語の研究——日本語の造語法・訳語法——』、2004、明治書院
- 王敏東・許巍鐘「「扁桃腺」という言葉の成立について 付：関連語彙にも触れながら」『国語語彙史の研究』二十四、2005a

王敏東・許巍鐘「台湾における医学用語について——「扁桃腺」を例として——」『国際シンポジウム：西洋学問の受容及び漢字訳語の形成と伝播（予稿集）』、2005b、（上海）

『大辞泉』小学館

<http://dic.yahoo.co.jp/bin/dsearch?p=%C1%A3%B4%E2&stype=0&dtype=0>

（中国語）

国立編訳館主編『病理學名詞』（台三版）、1970、正中書局

国立編訳館主編『實驗動物及比較醫學名詞』、1996、芸軒図書

『辞源』（正統編修訂本台一版）1957、（正統編修訂大字本台四版）1969、（修訂正統編附補編台一版）1970、（全部増修台二版）1978、（全部増修台四版）1979、（増修台七版）1984、（台増修版第十次印刷）1997、商務印書館

『辞海』（台二版）1957、（大字修訂台五版）1972、（大字修訂本台三版）1969、（大字修訂台十二版）1974、（『最新増訂本辞海』初版）1980、（八版二刷）1992、（『最新増訂本辞海』十版）2000、中華書局

国立編訳館主編『動物學名詞』、2003、復文書局

王敏東、許巍鐘「论台版《辞海》中的「（～）腺」」第八次汉字书同文学术研讨会、2005c、（成都）

『教育部重編国語辞典』<http://140.111.34.46/dict/?open>

謝辞：小論の執筆にあたり、医学専門知識や、中国語及び西洋語における専門用語について台湾大学医学部の許巍鐘先生よりご教示をいただいた。記して厚くお礼申し上げる。

（2005年7月12日 第1稿受理）

（2005年9月7日 最終稿受理）